

北支

北支での体験

石炭と兵隊

秋田県 佐藤彦四郎

―佐藤さんの徴集年と、入隊は何時、何処でしたか、東北地方の入営は大変でしょう。

私は昭和十七年徴集ですから、昭和十八年一月二十日に現役徴集で北部第六十二部隊（盛岡）の篠原隊へ、北支への補充要員として集結したのです。

当日は一メートルも雪が積もっていて、吹雪の中をゴムの短靴と、母が米一俵で買ってくれた新調のオーパーを着、服は大正八年入隊の叔父の軍服、頭には青

年学校の戦闘帽を被り、意気揚々と横手駅へ向かった。これが私の入隊の時の姿です。

一月十八日は朝からの吹雪で、見送りの方々を悩ませました。門口で見送る両親、激励してくれる村の衆。大きな日の丸と、皇軍万歳と染め抜いた長旗の中、同級生の柴田正吉君が大きな声で「万歳」を三唱してくれ、壮途に就いたのです。

途中わざわざ遠回りをして、吉田尋常高等小学校に小野校長を、役場に立ち寄り東海林村長に、それぞれ決意を込めて挨拶した。

約十五キロの雪道を五十人の列が三時間半で横手町へ到着、知人宅で持参のおにぎり、漬物・煮物など手弁当で昼食をして、腹ごしらえをした。

午後、横手駅前は見送る人で溢れるよう、青年団、

愛国婦人会など大混雑である。発車まで歓呼の声で激励された。発車と同時に同級生の柴田正吉、飯野長之助両君が同乗、隣の相野々駅まで送ってくれた。柴田君とはこれが最後の別れになるうとは夢にも思わなかった。

其の後、彼は昭和十八年、満州へ応召入隊し、二十年八月終戦を前に、東安省虎林県でソ連軍の怒濤の進撃によって戦死してしまいました。最愛の友を失い、残念無念でした。

私は当日、同村の藤井喜芳君と一緒に夕方盛岡に着、指定された旅館に宿泊しました。翌十九年、同村の菊池久一、菊池利兵衛両君と合流、隣接町村の者五人と同室、地方人（民間人）として最後の宿泊をしたのです。

一月二十日は晴天でした。旅館から四キロの道を歩いて入隊しました。秋田から寒い盛岡へ兵隊の卵が入ったのです。以来検査・検査の毎日で、一月二十八日早朝盛岡駅に向い行進したのです。駅には見送りの人は無く、発車前に師団長がホームまで来られたのです。

全員車内で起立敬礼したことが、今私の記憶によみがえります。

―都会と違い東北の人情というか、習慣というか、盛大な見送りでしたね。盛岡では文字通り一時集結ということですね。

するとそのまま戦地へ出発されたのですか。

一月三十一日夜、下関港を出帆、二月一日早朝釜山上陸、二月三日奉天市通過、二月六日目的地、中華民国山東省徳県（徳州）に到着、独立混成第七師団、独立歩兵第二十八大隊（北第二九七四部隊）宮口隊へ入隊したのです。

大隊の配置は、第一中隊徳県、第二中隊青城、第三中隊寧津、第四中隊辺臨鎮、連隊砲・大隊砲・機関銃は寧津で、私たちはそれぞれ分散して教育されたのです。

二月十一日の紀元節には式典があり、式後祝賀会が営内でありました。この時、初めて古参兵と顔を合わせ、酒を汲み交わしました。以来、教育隊としての訓練と演習が続き、厳しさに耐えながら四月下旬一期の

検閲を受けて、どうやら一人前の兵隊になりました。それから、古参兵と内務班も一緒になり、班長や古参兵の洗濯、兵器の手入れなどしながら忙しい毎日でした。

八月、山東省張店に移動、十月無糧県の一寒村に駐屯、奥野二郎上等兵以下八名で警備につきましたり、駐留地の警備、討伐などに従軍しながら、兵隊としての戦地訓練をしていたのです。

翌十九年三月上旬、京漢作戦参加のため周村に集結した。四月八日、河南省興隆駅に下車して行動準備を始めました。四月十九日、新黄河渡河、新鄭、許昌、襄城、洛陽、臨汝鎮まで進出して作戦を開始したのです。

さらに反転して京漢線の東方に転戦、同家口、碓山まで南下して、作戦は七月下旬に終了したのです。その間、内地から補充要員が編入されたり、現地在留の予備役の人が召集されたりして作戦に参加したのです。

私の作戦間の話をしますと、開始した時は中国軍の古い迫撃砲二門で編成した臨時迫撃砲小隊の砲手とし

て行動していました。八月から小隊が改編、迫撃砲中队編成となったので人員も多くなりました。この時の中隊長が大木少尉です。隊長は岡山出身で、山東省濟南付近の萊蕪炭砦に勤めていた時に、現地召集されました。

迫撃砲中队は部隊本部と共に京漢線の碓山駅で警備していたのです。たまたまこの土地で、石炭の露頭が見つかりました。中国人は前から知っていたようですが、大木隊長の知るところとなって、部隊に進言して試掘をしたかどうかということになったのです。

当時私は中隊長の当番をしていましたが、その試掘の研修と器材の受領のために萊蕪炭砦まで派遣を命ぜられたのです。ほかに上官である現地召集の古谷伍長と行きました。古谷伍長は山梨県出身ですが、早くから中国へ両親と来て、煙草公司(会社)を手広く経営していたようです。

―警備隊が炭砦発見とは、仲々のお手柄でした。これも現地召集の方々だったので、スムーズに手順がとれたのでしょうか。

十九年一月下旬、まだ肌寒い碓山駅から列車に乗り出発、鄭州から新黄河の鉄橋を渡り濟南へと向かいました。数多くの戦友たちが血と汗を流して敷設した鉄道を、感慨深く走りました。新黄河の鉄橋は仮設されたものなので、音をさしませながら、ゆっくりと渡りました。昨年の渡河作戦が夢のように浮かんでいます。

濟南では古谷伍長が約一年振りの帰宅とあって、両親、妻子とも大変な喜びであり、私も故郷の両親に再会したような気持ちでした。二日後、濟南駅から南の泰山駅から民営のバスで約二時間、萊蕪炭砦に到着しました。

萊蕪炭砦は日本人が管理しておったようで、多数の日本人がいました。その警備のために衣部隊（第五十九師団）一個中隊が駐屯していました。早速会社の事務所に挨拶をし、中隊長に申告をして協力をお願いしました。警備中隊から特別に上等兵の方がお世話をしてくれ、宿舎は会社の寮を利用してもらい、会社の方々から大変お世話になりました。

翌日から早速係の方から会社の内容を聴き、さらに

現場を見ながら説明を受けました。このボーリングは人力によるもので、中国人が二人で試し掘りしておる軽い器具でした。パイプの太さも三センチぐらいのもので、たいた記憶していません。深さもどのくらいか忘れましたが、たいしたことはなかったと思います。中国の石炭は露天掘などで試掘も楽なようでした。

その後、会社関係の方々から手厚いもてなしになり、社員の北海道から来られたという佐藤姉妹からもお世話をいただき、近日中に日本へ帰られるとのことである。への手紙も依頼することが出来、望外の喜びでした。

試掘の操作も一週間で終り、器材一式とパイプ五本を梱包し、トラックで運搬してもらい、心残る萊蕪炭砦に別れを告げ、再び濟南の古谷宅に二泊、再会を期して碓山駅到着は五日後でした。

部隊は四月から始まる老河口作戦の準備に忙殺されていた結果、石炭試掘は実行不能となったのです。

戦争では、さまざまな非道が両軍にあったが、反面このような開発のための作業が、軍民の中で行われたことも事実です。これが成功していれば恐らく中国の

ためにも役立ったことでしょう。

老河口作戦は四月から八月終戦まで続き、部隊は創設以来の犠牲者を出して、河南省鄆城付近の大趙という部落に集結して、虜囚として帰国のあてもない生活を送ることになったのです。

翌二十一年四月下旬、ようやく帰国の途につくため上海を出帆、佐世保上陸、自宅へ帰ったのは五月三日でした。何よりの喜びは、家族一同元気なことであり、三年三カ月の、長くて短い軍隊生活でした。戦後は農業に従事し現在に至っています。亡き戦友のご冥福を祈りながら。

—大変珍しい体験を聞かせて頂き有難うございました。